

県中教研

特別支援教育部会だより

第 35 号

発行日 令和2年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 安田 恵子
題 字 金山 泰仁 先生

一人一人の成長を願う

指導主事 森谷 信久

今年度参観した特別支援学級の授業では、成就感や達成感を味わう生徒、また、生徒一人一人の成長を願う教師のきめ細かな支援をたくさん見ることができた。

特に、印象に残っているのは、異学年の生徒が在籍する自・情級の自立活動の授業である。1年生のA男は同級生と一緒に活動することに大きな抵抗感をもっていた。しかし、本時の活動では、3年生の生徒が、修学旅行の写真を見せながら、仲間との思い出を生き生きと語った。その時A男の表情が一変し、「自分もみんなと一緒に給食を食べたい」「同級生ともっと交わりたい」と前向きな思いをホワイトボードに書いたのである。A男がこのような思いを抱くことができたのは、3年生の生徒が、「みんなと一緒に活動できたからこそ楽しかった」と強調して発表していたこと。そして、A男に是非同級生とのコミュニケーションを楽しんでほしいという先輩としての強い願いがあったからだと感じた。

さらに、教師の柔軟な対応にも心を打たれた。笑顔や言葉かけ等の共感的・受容的な態度、タイミングのよい即時評価等、生徒の実態に則した対応は、日々労を惜しまず支援を工夫している証である。先輩と後輩の信頼関係を構築し、個々の変容や成長を促す愛情あふれる授業であった。

今回、学習指導要領改訂により特別支援学級に在籍する生徒や通級による指導を受ける生徒全員に対して、個別の教育支援計画と個別の指導計画を作成することとなった。また、生徒に対する支援の目標を長期的な視点から設定することや、一人一人の指導目標、指導内容及び指導方法を明確にし、教育的ニーズに応じた適切な指導、支援を行うことの重要性が示された。

前述の授業のように生徒の実態を的確に把握することが重要であり、今後更に、家庭、地域及び関係機関との連携を図り、組織的・継続的かつ計画的にきめ細かな指導や支援を行うよう努めていくことが大切だと考える。

(西部教育事務所)

子供たちの十分な学びのために

部長 安田 恵子

今年度は、「特別な支援を必要とする生徒が個性や能力を最大限に発揮し、進んで社会参加できるための指導はどうあればよいか」と研究主題を設定し、副題に「生徒が成就感や達成感を味わえる学習過程の工夫」を掲げて研究を進めてきた。

第63回研究大会では、生徒が興味をもって主体的に取り組み、成就感や達成感を味わうことができるような場の設定・工夫に重点を置いた授業を提案した。東部地区は、野菜を栽培した活動を発表する生活単元学習の授業であった。野菜を育てたり、調理したりした活動をパソコンでまとめて発表し、アドバイスカードによる振り返りを行うことによって「家でも野菜を育てたい」という発言もあった、将来につながる学習であった。西部地区は、個々の実態に合わせたサーキット運動を行う自立活動の授業であった。目標を目指して運動しながら励まし合ったり、タブレットの映像で振り返ったりすることによって、さらに運動の意欲を高めた学習であった。

どちらの授業においても、体験を通して学んだことを学び合う場面を工夫することによって、生徒は成就感や達成感を味わうことができた。授業の振り返りの様子から、活動に満足して自己肯定感を高めたことがうかがえた。また、ICTを活用することで、視覚的に分かりやすくなり、コミュニケーション能力を高める手助けになっていた。

今後の課題は、これまでの成果を踏まえ、教育活動全体を通して成就感や達成感を味わい自己肯定感を高めるだけでなく、学習上または生活上の困難を改善・克服し、他者と共に生活していく意欲やスキルをもつことができる学習過程を工夫することである。

特別支援学級だけでなく、通常の学級、通級による指導においても、子供たちの十分な学びを確保するために、一人一人の教育的ニーズに応じた指導や支援を一層充実させていきたいものである。

(高・伏木中)

第63回 富山県中学校教育課程研究大会

東部地区（魚津市立西部中学校） 令和元年10月9日（水）

東部地区の研究授業と部会協議が魚津市立西部中学校で行われた。

研究授業は、知的障害特別支援学級（1年生男子1名、女子2名、2年生男女各1名、3年生男子1名在籍）で、野口雅子教諭による生活単元学習の授業が公開された。授業公開は、事前に録画しておいた授業映像を視聴した後、協議を行うという形で行った。

本学級では、これまで生活単元学習として野菜の栽培や収穫、調理、活動のまとめ（発表資料づくり）を行ってきた。最終的な目標は、学習参観で保護者に取組の様子を伝えることであり、その前段階として、本時は自閉症・情緒障害特別支援学級の生徒に向けての発表の場が設定された。実態に合わせた個人の目標を設定し、一人一人がプレゼンテーションソフトを用いて発表し、互いに付箋へアドバイスを書いて伝え合った。自閉症・情緒障害特別支援学級の生徒には自立活動としての目標が設定されており、目的が明確な合同学習となっていた。

部会協議①では、研究主題や本時の視点を踏まえて協議題を設定し、グループ協議を行った。「授業映像を生徒に見せて、自己評価とのずれに気付かせてはどうか」「付箋を集めたり貼ったりを生徒に担当させることで関わり合いが生まれるのではないか」「気持ちが落ち着かない生徒に対して、しっかり活動できたことを褒めるチャンスのをがさず、認めてあげることが必要」などの意見が出された。

豊田真一指導主事（東部教育事務所）からは、

- ・身近にある野菜を題材にしたことにより、生徒にとって、取り組みやすい学習であった。
- ・ファイルにこれまでの活動が詳しくまとめられており、自分の成長も振り返ることができた。

・野菜を育てるだけでなく、活動の様子を家族に伝えるところまで計画されており、学校と家庭との連携につながっている。

・欠席しがちな生徒に対するねらいも設定されており、一人一人の生徒を大切にしている様子が伝わってきた。

などの助言をいただいた。

部会協議②では、「中学校における特別支援学級間の交流～富山市内中学校における取組」について、日俣千春教諭（富・藤ノ木中）と岩城昌宏教諭（富・大沢野中）からの実践発表があった。

富山市で続けてきた「合同学習・スマイル交流」の歩みや成果・課題、そして生徒同士が関わる中で自立へ向けての力を付け、成長していく一人の生徒の様子が紹介された。また、卒業生との交流や近隣の支援学校との交流の実践事例も発表された。

豊田真一指導主事からは、

- ・スマイル交流のよさは、生徒にとっては貴重な体験から学ぶことが多いことや人間関係を広げてくれること、教師にとっては生徒理解を深められることである。
- ・今後は各校区で、交流及び合同学習の一つである、居住地校交流を積極的に行ってほしい。
- ・生徒が「できるようになること」を信じて、日々の支援にあたってほしい。

などの助言、励ましの言葉をいただいた。



宮本 典子（黒・桜井中）

第63回 富山県中学校教育課程研究大会

西部地区（射水市立射北中学校） 令和元年10月9日（水）

射水市立射北中学校において、西部地区の研究授業、部会協議が行われた。

研究授業は、射水市立射北中学校の知的障害特別支援学級（3年生1名、1年生1名在籍）で、海老英里教諭が自立活動の授業を行った。4月以来の自立活動で生徒の実態を観察、分析し、その結果、自立活動の6区分27項目の中から「1健康保持(5)」「5身体の動き(5)」「6コミュニケーション(4)」を内容として取り上げ、単元「3F (fun, friend, fight)」の本時の学習を展開した。

生徒自身が自分の目標を設定し、体育館に、体力向上ライン、バランス力向上ライン、作業力向上ラインを設け、サーキットトレーニングを行った。目標を達成することで自信をもたせ、また、ペアでトレーニングを行い、適切なコミュニケーションができるようにすることもねらいとした。

その結果、ボールやタオルを使った準備体操から始め、サーキットトレーニング時には、生徒が自分の興味関心や能力に合わせて運動の種類や回数を選択し、自分で立てた目標に向かって意欲的に取り組んでいた。ペアで計測したり、励ましの声を掛け合ったり、コミュニケーションの場面も見られた。

参加者は、体育館で直接参観した。以前より、サポーター（TT教諭）を交え、体育館で自立活動のサーキットトレーニングを行ってきたこともあり、生徒は緊張を見せず、意欲的に活動に取り組んでいた。また、毎時間のサーキットトレーニングの成績を模造紙の表に記録したり、生徒がタブレットで自分の姿を確認したりして、学習の振り返りができるように工夫されていた。

部会協議①では、研究主題を踏まえ、振り返りでの自己評価と相互評価の効果や、相互に応援するなどの声を掛け合うことの効用等について協議した。



授業者からは、本時までの自立活動で日常生活でできることが増え、会話が

長が見られたと説明があった。

森谷信久指導主事（西部教育事務所）からは、

- ・生徒の実態を把握し、一人一人の障害に応じて、個性や能力が最大限に発揮されるように自立活動が行われていた。活動の見通しをもち、安心して参加できる内容を実施することが大切である。
- ・自分を知り、自己選択して、成功を積み重ねる自立活動が行われた。試行錯誤することが自己選択、自己決定することへとつながっていた。
- ・本時の授業では互いに励ましの言葉をかけるところにも思考判断する場があり、マイクを使つての言葉かけや、「ピンポン」と音がする器具の使用もよかった。

という助言をいただいた。生徒の実態を把握し、個性や能力に応じた自立活動を実施していくことの必要性を実感した実践であった。

部会協議②では、協議題「新しい学習指導要領のもとでの特別支援教育」に基づき、富山大学人間発達科学部教授小林真先生から、具体的な資料を提示していただきながら、社会参加のビジョンをもつなど、自立活動の要件について説明された。また、「道徳教育と自立活動との有機的な連携」や「支援計画の立案のための生徒の実態把握」についても説明され、富山県教育委員会開発の「学校生活チェックリスト」と「支援検討チェックリスト」、「個別の教育支援計画作成・活用マニュアル」の活用も紹介いただいた。

村中 徹（小・大谷中）

新しい学習指導要領のもとでの特別支援教育

(第63回西部地区大会での講演要旨)

富山大学人間発達科学部 小林 真 教授

1 研究授業の講評

自立活動の授業は、生徒の実態に即して行われる。小学校からの個別の指導計画に基づき、生徒が学習上の困難を克服するために必要なことは何かを、中学校が判断して行う。姿勢の保持や身体バランスに困難をきたす生徒もいるので、(今日のように)自立活動でサーキットトレーニングやストレッチを行うことも悪くはないが、習得した身体技能が日常生活の質を高めるために生かされること、生徒同士の役割分担や協力が日常生活でも行われること、生徒が自分の成長した姿を実感でき、ポジティブな気持ちを保てるのが大切である。

中学校では「14歳の挑戦」があるが、なかなか作業学習の時間をもつことができず、特別支援学級の生徒にとっては就業に向けた体験は難しい。自立活動の中で自己理解を深め、将来の社会参加につなげられるとよい。

2 新しい学習指導要領における特別支援教育

新学習指導要領では、

- ① 保護者のニーズも含めた、生徒の実態把握を基に自立活動を取り入れ、個に応じた教育課程の編成を行うこと
- ② 特別支援学級と通級指導教室で、個別の指導計画や個別の教育支援計画を作成・活用することが必須になったこと

が大きな変更点である。また、教科化された道徳の指導内容については、日常生活に生かされることが配慮されなければならないが、これは自立活動で大切にすべきことと同じである。

中学校段階では、健康の保持・増進、心理的な安定を基盤として自己理解を進め、社会との接点を知り、将来像を想起できるようにしたい。そのためには、人間関係を形成し、コミュニケーションスキルを獲得することが望ましい。「キャリア意識」の原型を形成することは学校だけではできないので、個別の教育支援計画の作成・活用(他機関との連携)が必要である。



3 道徳教育と自立活動との有機的な連携

道徳科の内容、A 主として自分自身に関すること、B 主として人との関わりに関すること、C 主として集団や社会との関わりに関することは、自立活動の内容と密接に関連するので、自立活動と連携させると教育効果が高まる。知的障害や自閉スペクトラム症の生徒は、交流級の集団の中で学ぶ一般論を「我がこと」としては捉えにくい。また、注意欠陥多動障害の生徒はうっかり話を聞いていないことがある。

そのため、道徳科の内容を踏まえ、自立活動でロールプレイを取り入れるなど、実践力を付けることができれば、道徳が日々の生活で実践できる。また、知的障害特別支援学級では生活単元学習としていくつかの科目を合わせることも可能であり、実態に合わせて指導するとよい。

4 生徒の実態把握／支援計画の立案のために

富山県教育委員会が開発した2種類のチェックリスト「学校生活チェックリスト」「支援検討チェックリスト」を、生徒の特徴を共通理解し、支援方法を考えるきっかけとしてほしい。また、『個別の教育支援計画』作成・活用マニュアルを利用して、3～5年を見通し、学校や地域で生徒がどのような支援を必要とするかを、学校が中心となって整理してほしい。総合教育センターのホームページからダウンロードが可能である。

川端佐和子(氷・西條中)